

布一枚しかない。

兵隊は病気になるっても、三十八度以上の熱か外傷がなければ休ませられない。頭が痛くとも神経痛でも休まれない。下痢すると、看護婦が来て兵隊を庭に並べ同時に大便をさせ、赤便か白い粘液便が出ないと休ませない。私は足の裏に底豆ができたので医務室に行った。日本の軍医は診てから「すぐ切る、麻酔がないが我慢しろ」と言って、寝台につかまって切ってもらった。痛い痛くないの話にならない、脂汗が出た。それで三日間休ませてもらった。

夕方になると大きなマラリヤ蚊がたくさんいて、遠慮なく裸を刺す。マラリヤ病人も多く出た。高熱を出して苦しむ姿、家族には見せたくないと思った。

ウズベック人は回教で、一日に何回か太陽を拝む。日中には綿入れを着て外に出る。ウズベック人は男も女もはだしで歩く。

アンジジャンも緑の多い町のようにあったが、見物したことはない。十一月になって長袖シャツと下ズボンが支給された。

今後このようなことがないことを祈ります。抑留生活はつらかった。

我が青春のあの日あるとき

岩手県 本宮 龍平

東北満からの逃避行

昭和二十年十月二十六日に頭道河子部落の対岸に着して大休止、野営すべく準備していた。突然、白旗を掲げ、満軍の下士官らしい者が野営地に向かっているので、騎兵操典に基づき、通して聞いたところ、「日本は無条件降伏をした。関東軍は各都市部近郊において収容され、祖国に帰る日を待っている」、「当面は対岸の頭道河子部落の保安隊に身を寄せ、ソ連の武装解除に応ずるべきである」と。

今までも何回もこのような情報があったが、部隊長は幹部を集めて協議した。今や、これ以上の行動は犠牲者を出すのみであるとの判断から、隊長は武装解除

を受け、一日も早く祖国帰還を急がなければならぬと決意された。九十三人（総員二百四十人、出発の時点では百八十人）全員集合となって、隊長の訓示があった。保安隊長は笑顔で迎え、心ばかりの歓迎の祝宴を催してくれたが不安は隠しきれなかった。私は傷ついた身であり、終始ベーチカにへばりついてた。それから行軍もあり、森林軌道車に乗り込んで十月二十九日にソ連軍の駐屯地、横道河子に向かった。

人間は生きるために食わなければならない。食うためにはいろいろな危険を伴った。我々がここまで到達するのに最前線から七十日間、道のりにして約二千里口。食糧調達のためには身を危険にさらさなければならぬ。そのたびに犠牲者が出る。これにまさる苦勞は一般邦人や開拓団員、義勇隊の逃避行である。女たちは子を背負い、あるいは手に抱え、老人もみな着のみ着のまま。食糧不足で栄養失調になり、昼夜の別なく襲撃や物取りに遭い、母子とも疲労困憊から倒れていくさまは地獄絵のようで、筆舌には尽くし得ない。祖国へ帰国すべくあの東北満からの逃避行は、生還者

のだれの胸中にも消し得ない大きな苦悩として焼きついていると思われる。胸が痛くなり筆が進まない。

掖河の野戦病院で

牡丹江に近い掖河は第五軍司令部のあったところで、大きな陸軍病院があった。ここは軍の施設も町も爆撃されていた。病院も半分あるかないかの状態であった。私は傷病兵となったため、ここに送られた。前線から送られた軍人も地方人もいた。そして従軍看護婦も多くいて、病院では女はみな断髪にしていって軍服着用だ。オールバックの可愛らしい男姿の兵隊さんである。ソ連兵士の暴行を避けるためである。

数千人いた患者は栄養失調と熱発患者が多く、毎朝、病室から何人も死んでいった。ここでも食糧が極度に不足している。軍医はソ連の女将校もいて、助手に日本の衛生兵がついている。私は肩と大腿部貫通の荒療治に耐えながらようよう歩けるようになり、炊事場に飯盒で水を盗みに出かけたことがあった。炊事係も忙しいので水汲みの手伝いをしたら水をくると言う。傷口がまだ痛みびっこを引いていたが、この作業に耐

えて頑張った。炊事班長の中尉の目にとまって炊事で働くことを許された。痛みを我慢しての勤務である。

炊事にいることによって体の回復が早い。そのうちに炊飯係の班長となった。

風呂釜のような飯釜十一基と、その三倍もある大きな釜二基はかゆを炊いた。コメは関東軍蓄積の朝鮮米。これでも患者に届く量は、飯盆の薄い掛け盒に半分にならない。特によく炊けたときは病院の日本軍の総括である少将閣下に献上して、英国製たばこのロビークインを頂戴したこともある。糧秣受領に外出して糧秣庫に行くときもあった。この糧秣庫にソ連の通訳としてただ一人、この仕事を任せられている日本人がいた。後で聞いたら、岩手県出身だという。

こうして、おかげで元氣を取り戻したころ、病院内の元氣な者たちで演芸会を催すことになった。我が炊事班でも二、三の出し物があって、私も新金色夜叉に出演することになった。全国から集まっているから、この中には大連市の音楽学校の校長とか作曲家の早乙女晃（当時日本では五本の指に数えられた）もいた。

我々内地の田舎では見られない大演芸会となり、ソ連将校を喜ばせた。我々炊事班のためにも早乙女晃が歌をつくってくれた。「朝の三時に飛び起きて……」とか「掖河小唄」とかあった。やがて北満の冬も四月となり、軍医の身体検査の結果、東京ダモイ（実はソ連に送られること）になったのである。道は雪解けとなって、日本の故郷の岩手地方と同じであった。

監獄列車

昭和二十一年四月中旬、北満の掖河は雪解けの道となっていた。マンドリン銃を肩にしたソ連兵に「ダワイダワイ」と追い立てられ「ビストラ、ビストラ（早く早く）」と自動小銃を突きつけられ、野戦病院退院の私たちと日本人たち約一千人が掖河の貨物ホームで「ストーイ、ストーイ（とまれ）」と監視兵の号令に黙々と従っていた。

ホームには二十両の貨車がつながっていた。広軌道で貨車が大きくはあるが、七十人くらい乗せられたと思う。まさに牢獄貨車である。両端は二段式に急造され、片側の扉は約三十センチほど開かれ、その隙間の

下方に木製の排泄用の筒が斜めに差し込まれている。

ソ連兵の説明はウラジオストックから東京ダモイ（帰国）というだけである。不安はあったが帰りたい一方なので、ソ連兵の口車に乗せられたとは夢にも思わなかった。この先のことはだれ一人として知る由もなかった。

この夜は貨車は終夜そのまま、暗やみの中にやせ衰えた体を伏せて、じっと目を閉じている者が多い。汚れ、破れた軍服のままだれもが黙々と思いにふけっているようである。車両にはむしろ安堵の気持ちなが流れている。運命に逆らうすべがないのである。夜中に突然パンパンと鋭い銃声があった。満州の在留邦人組であるうか、貨車の底を抜いて逃亡したのだと聞いた。翌朝、列車は綏芬河を通過していた。

国境の町綏芬河は山の斜面にあつて寂しくひっそりとしたたずまいであった。やがてトンネルを通り、国境を越えて、夢のような異国の丘グロデコである。ソ連式民家が見え始め、はかない希望を乗せた列車は夜となく昼となく走り続けた。そのうちにだれかが反

対の方向に走っているうだと言ひ出した。ウラジオストックは要塞地帯であるからハバロフスク経由で日本に帰るのだというが、どうして回り道をするのかわからない。期待は裏切られた。

出発して何日かは沿線は春の景色が感じられていたが、シベリア鉄道を北上するにしたがつて、初冬から冬の真ただ中になり、シベリアの雪原と森林の中を列車は走った。猛吹雪に松が揺れ、雪は下の方から舞い上がっている。日に一度は、炊事車から飯上げのため列車はとまる。飯盒に少しのスープとパンわずかが一日分である。機関車の給水のため、一日も二日ともまることがあつて時刻とはまるで関係がない。そんなときソ連兵の物取りが始まる。まず前の方から始めて奥の方にやってくる。抵抗はむだであり、すぐ発砲する。前途が思いやられ、停車のたびに重苦しい空気になる。

それからもう幾日走ったろうか。チタの駅に停車した。全員の入浴タイムである。みんなの顔や手は黒くすすけて目ばかり光っている。浴場はソ連式のもので

日本のような浴槽はなく、サウナ風呂のようなものでバーニャといわれた。裸になって衣類をまとめ、小部屋で百度の熱で高温殺菌する。滅菌している間に蒸し風呂の中で少しばかりのお湯と少量のムイロ（石けん）を使い、タオルがないのではろ切れで体をふく程度の入浴である。いくらか体が軽くなったようであるが、かえって疲労を感じる。

夜明け方海が見えた。日本海だと言って喜ぶ者もいたが、実はバイカル湖だった。このころの風景はまた春になっていた。湖面は霧に覆われ、真っ白い客船が走っている風景は浪漫的でのどかである。列車はこの湖畔沿いを走って、夜の十一時過ぎまで湖面を見ることができた。さらに西へ向かう。イルクーツクからタシエットを過ぎると、畑の麦が青くなり、進むにつれて十五センチから三十センチに大きくなる。このころには旅にも幾分かなれ、気候もよくなり、景色を見ながら歌も出るようになった。

「夕べに遠く、木の葉散る、並木の道にはろほろと、君が幌馬車見送りし……」幌馬車の歌である。ノボシ

ビルスクから南下して、アルマアタ、さらに最終着駅タシケントに着くころは、麦が刈り入れの時期となっていた。実に長い長い監獄列車の二十四日間であった。

ラーゲル時代

収容所に入る前に衣類を消毒してからということ、その夜は野宿することになった。暖かい夜であった。カマボコを並べたような兵舎で、中は三段式の鉄の揚げ床である。五百人単位の収容所で、まず身体検査のため裸にされて体毛を全部剃られた。頭にはDDTをかけられ、衣類の検査と消毒だ。二十日ぐらいいは仕事はなく、身の回りや収容所内外の清掃だけであった。給食は後で述べるような給与ではなく、割合によかったように思う。ほとんどが関東軍糧秣倉庫より押収したものであった。

自国民一般もこれだけの給与は取れなかったし、地方人が炊事場をのぞいて、分量はわからないだろうが、自国民よりよい物を食わしていると言って憤慨していた。給与の基準は、穀類三百グラム、黒パン三百グラム、野菜六百グラム、魚百五十グラム、粉食百グラム、

肉五十グラム、砂糖十五グラム、みそ三十グラム、塩十五グラム、その他たばこ、石けんである。これを忠実に守っていたら食糧にまつわる悲劇はなかっただろうが、これはソ連の理想を描いたもので、当初は黒パン二百グラム、スープ（肉がゆの少し濃いもの）だけで、基準給与の五〇%以下であった。

逐次、各班ごとにコルホーズ（国営農場）や市街地で軍関係の建設現場で、建築作業やキルピーチ（れんが）の運搬、キルピーチ工場での作業が行われるようになった。引率するソ連兵による人数の点呼にも感心しないことがあった。そのために溝を掘ってあって、営門前で一人一人が溝をまたぐことによって人数の確認をする。掛け算を知らないのである。間違えばまたやり直しである。帰営のときもまたそうであった。

その当時恵まれない暮らしの老人が、ロシアのツアーのミカドを思い出し、ヤポンスキー（日本人）ミカド、ハラショーと言った。この老人は日露戦争のとき捕虜として大阪にいたことがあるそうで、一銭で饅頭が買えたと喜んでいた。大方四十年前のことだと思う。

自由もなく、ただ働くだけだと不平を漏らしていた。彼らは赤軍、特に共産党のことについては一切口を閉ざして、これに触れるとあたりを見回すのである。

このタシケントはウズベック共和国の首都であり、アジア州の西アフガニスタンの北方にある。この道はシルクロードの道でもある。何か月後であったか、分遣隊となり移動したが、そのたびに東京ダモイの口車に乗せられる。トルクメン共和国でカラクム砂漠の乾燥した低地、ここは南のイラン。アフガニスタンとの国境地帯は山地をなす。トルクメンとはトルコ系部族のアジア人のこと。

作業はサキサオールという灌木が砂漠に砂山のあちこちに密生している。軍用のまきにする油の多い木で、これを取る仕事である。タポール（斧）だけを持って森に入る。ノルマは一メートル以上の長さで、高さ一メートル、幅三メートルであったが、だんだんにナチヤニック（現場監督）に高さをふやされ、ノルマの達成は容易でなかった。朝食は少々の黒パンとスープを暗いうちに食べ、昼食はない。三食にすれば食べたよ

うな気がしないからである。作業現場までの距離は最初は二キロぐらいであったが、日増しに奥地へ伐採して進むので、その距離は加速度的に延びていき、一か月もすると六キロ以上にもなった。この砂山の道を歩くのは、衰えた体力では容易でなく、現場に着くまでかなり体力を消耗してしまう。日本人の一部の者はノルマ以上にやって他人に迷惑をかけるが、自分はパンを少しでも多く食べようとする。この人たちは後で体を壊し、見るかげもない病身となった。悲しいことである。

また、何か月かすると取り尽くしてしまい、次の場所への移動である。ラーゲルは自分たちでつくる半穴式の小屋である。私たちには何を見ても食べ物に見える。あるとき私はソ連兵の可愛がっていた猫が小屋に入ってきたので、そっと懷に入れ、こん棒を持ち、藪の中に入った。頭を一撃二撃したら死んだ。これを料理し、飯盒を持ってきて詰め込んだ。翌日の作業は戦友森川と一緒に。作業場はできるだけ皆と離れたところをやった。ノルマの達成も積み方によるもので、こ

のころは要領もわかって早くすまし、久しぶりの肉鍋ならぬ猫鍋にありついた。森川が大事にためた砂糖を入れて、できるだけうまいものにしよという考えである。煮れば煮るほど泡が出ることも気にしない。二人は元氣百倍、お互い顔を見合わせた。その日から一週間はだれかに密告されはしまいかと心配の連続であった。ばれると間違ひなく銃殺である。

我々は移動するたびにいろいろなことに遇う。監視兵の横流しもあり食糧が乏しかったが、ここカラコルム砂漠では砂山に亀がいた。私は海亀しか知らなかったが、山亀といって甲羅の厚い肉の多いもので、この土地の住民は宗教的に豚と亀は忌み嫌っておった。食わんがためなら作業のつらさも忘れ、できるだけ早くすまして亀捕りに出かける。日を追って奥地へ奥地へと行かなければならない。暑い地方なので私はふんどし一つになって、手製の下駄をはき奥地へ奥地へと行った。帰りは下駄の跡をたどって帰るのである。欲と二人連れなので天秤棒にぶら下げて六匹も捕った。足がふらふらである。そのうちに帰る道がわからなくな

った。心を決めた。どうせつらい作業に出されるより、今晚一晩だけでもゆっくり寝ようと思った。まきは周りに山ほどあるし、護身用にマッチも持っている。かたわらにたき火をし、砂にもぐって寝てしまった。翌朝目を覚ましたら、もう太陽が真上に上がっている。十時は過ぎているだろうか。ゆっくり起きた。どこか以前の作業現場に行くわしてラーゲルに帰ることができると思ったのだ。一日中歩いても砂漠の真ただ中である。気が焦り出した。のどが乾く。ふと見上げたら、上空に大きなタカがゆうゆうと飛んでおり、近くの枯れ木の上に巣がある。よし、きっと何かあると思って登ってみたら、カラカラに乾いたけものとき大きな卵が二個あったので、しめたと思うていただく。その日もそれから夢中になって歩いたが、とうとう夜になってしまった。ところが遠くに火の明かりが見えた。ラーゲルでは時々道に迷い帰らない者のために当番を出し、小高いところに火を燃やしていた。方向がわかったので安心はしたが、そのまま帰ったのでは明日からまた作業である。それでラーゲルの見えるところでは

草をむしって食べたりして、休養をとり、作業の終わった夕方になってからふらふらしながら帰った。監視のソ連兵も喜んで迎えてくれ、砂糖とパン一切れをもらった。

道路修理に従事したときのことである。カザフ共和国にいたのであるが、カザフ人が多い。気が荒く、騎馬民族で、日露戦争のときのコザック騎兵の出たところである。カザフはソビエト第二の共和国で、ウズベック、トルクメン、スタンとも続いている。近くの農場に羊の群がいた。夜になって二、三人でこれを盗むことになり、私も参加した。夜は羊はおとなしく、首巻にして歩いても声を出さない。うまくいって三頭を料理した。穀類二分と肉八分の肉飯ができた。朝になると向こうから騎馬兵が鉄砲肩に走ってきた。さすが監視兵二人が屋根の上に上がって、マンドリン小銃をぶつ放して追い払ってくれた。食糧の少ないことがわかっていたのであらう。

そのうちに自動車隊に回された。伐採作業現場から集積地までサキサオール（まき）の搬出である。三人

一組で、積み込みはできるだけ中身は空洞にして、上辺だけ高く積んだように見せかけ、カンチャイ（終）と言う。ソ連兵の操縦はうまくいつている。道筋にはパオ（羊の肉をかためたフェルトでつくったテント）があり、遊牧民が住んでいる。石けんとミルクを交換したり、乏しい中からリベオーシカ（手づくりのパン）を少しもらったりした。お茶が一番貴重にされている。手づくりのバッテリーをつくる音は、ちょうど正月のもちつきを思い出させ、懐かしかった。バッテリーを取った残りでヨーグルトやかすを乾かして握って屋根に置く。一こぶラクダもいて、のんびりしていた。

大きな河を貨物自動車を渡すのに、ソビエトならではの仕掛けを見た。まず、河の両岸にワイヤーを張り、大きな船をワイヤーに輪でつなぐと、船尾のかじに当たる水の抵抗で自然に川岸に接岸する。日本ではこの原始的な方法を見たことがない。集積地に運ばれたサキサールはここで貨車積みとなる。私たちはここにも駐屯した。私はこの小さなラーゲルにも思い出がある。あるとき、ラーゲルの水汲みに外へ出た。ラー

ゲルから百メートルくらいところに水汲み場があるのだが、そこで水を汲んでいると、ロシアの老人が水筒（日本の将校用のもの）を見せ、ヤポンスキー、サルダート（日本の兵隊さん）、日本にもこんなものがあるかと尋ねるので、見るとウオッカである。頭をかしげると匂いがかがせられた。途端に、私はそれをがぶ飲みしてしまった。五臓六腑をかけめぐり、いい気持ちになってふらふらとしてラーゲルに戻ったまではいいが、歩哨に見つかって、一日炎天下に水おけを持って立たされてしまった。

こうして私たちが暖かい地方に來られたのは野戦病院から退院してきたからであるが、食糧の乏しいのはソ連全体であり、毎日の食事は家畜同然のエン麦をもみごとすり潰してつくった一片の黒パン、これはよい方で、トウモロコシやコウリヤンまでも混じっている。スープは皮も混じった小麦粉をのり状にしたものであった。飢餓と過酷な労働のノルマに悩まされながら異国の地に倒れていった戦友は、一年目は特に多かった。クシャチ（食いたい）、スパーチ（眠りたい）、ダモイ

(帰国したい)の毎日であった。

キルギス共和国の小さな炭鉱町にいたときは、ラーゲルより三キロくらいの駅で石炭の積み込み作業をやらされた。私たちに配給になった靴は英国製のりつばなもので、スキー靴である。ロシア兵もはけない大きなものばかり。栄養失調の私たちには通勤だけでも足が重く大変である。町の人からはヤボンスキー・ベジンキ(日本人の靴)と笑われた。毎日真つ黒な顔で大きな靴を引きずって帰る。駅員の中に女の車号係がいた。(トルクメン人のようである)。ソ連の若い女はみんなきれいに見える。私も車号係(列車、貨車の組みかえ、編成の企画作業)をしていたことがあるのでいろいろと話をした。

近くに製材工場があり、シベリアからの材木の貨車おろしに狩り出される。このころはみんな体力が衰弱し切っていて、長い木材に十二、三人肩を寄せ合い持ち上げる。ノルマも何もない。とにかく終わるまで、夜遅くまで働かされる。作業中、私は材木に挟まれすねを怪我した。このとき助けってもらった新潟県出身の

古川新太郎さんはラーゲルまで背負ってくれた。広いラーゲルに病休でただ一人。手当ては町の看護婦ナージャが毎日通ってくれた。熱桃臭い息をぶんぶんまき散らし、優しく美しいロシア娘だ。ドラストヴィチエ(こんにちわ)、スバコイノーチ(おやすみなさい)、私の心のうちにほのかな温かい言葉として残る……ダスヴィダーニヤ(さようなら)……ラーゲルの中の青春は淡く燃えていた。いくらか元氣を取り戻すと、今度は決死の食糧漁りである。

小高い丘にラーゲルがあつて、四方の高いやぐらに監視兵がいる。丘の麓には炭鉱町があり、お粗末なレストランもある。私は今もそうであるが、物を拾うくせがあり、一カペーカ、二カペーカと路上で錢を拾うことがある。これをコネにして、夜、町に出るのである。月夜の晩に建物の影を落とした線上を走って、鉄条網の下をくぐる。崖をくだって外に出ればしめたものだ。多民族連邦国だから人種差別はしない。大らかで、人なつっこく、親切な住民が多い。まずレストランに行つて小錢を出す。何も求められる価値のものがな

いが、人が集まってきて日本のことを聞かれる。電気があるか、飛行機があるか、バリカンがあるか等々である。おもしろい話、涙物語をすると、同情してパンの残りやチーズをくれる。帰りは町はもう寝静まっている。崖を登り、また月夜の影をねらう。手品師と同じ死角をねらうのである。

こうした生と死の際どい瀬戸際を歩いてきて、さまざまな思い出が錯綜する。薄れゆく追憶である。

私のソ連抑留体験

新潟県 宮野 泰

一、敗戦

昭和二十年五月二十日、徴兵年齢繰り上げで満州国立建國大学の学生であった私は、新京神社の境内での壮行式のあと、大勢の仲間たちとともに、臨時列車で北へ向けて出発した。十九歳の誕生日二か月前である。二十二日牡丹江市の近くの樺林街にあった満州第一二

一部隊（満州第一二〇六四部隊）飯田隊牧川隊へ編入、重機関銃中隊であった。この日があのソ連抑留という異常な体験につながるのだが、神ならぬ身知るよしもない。七月上旬現役の者だけが寧安街に新設された一二二師団挺身大隊（忠華部隊剛健隊第二小隊）に転属となる。毎日対戦車肉薄攻撃の訓練だけである。

ソ連軍侵攻と同時に東京城を経て鏡泊湖の陣地（といっても何もない山中）へ転進、ソ連軍の戦車を待つ。開戦直後降り続いた雨もやんで、真っ青に澄んだ碧空、静かな緑一色の山中に一人タコつぼの中で死を待つ。いろいろな感慨が後から後から頭をよぎるが意外と冷静であった。一種の諦観の境地であったのだろうか。ところが翌十六日夕刻、非常呼集で整列した兵たちは、部隊長から敗戦を告げられ慟哭した。

無念の涙はとめどなく流れる。ところが、その夜の兵士たちの行動の異常さは、またまことに驚くべきものであった。酒に酔い放歌高吟、喧騒の極みの状態となった。考えてみれば、長い間の抑圧と、死から解放されて一人の人間としての喜びの表現にほかならない